

30. 洗濯に於ける防皺性と、アイロン仕上に要するエネルギー消費について

高知大教育 ○西村 久子
吉川 せつ

1. 家庭に於ける洗濯作業の中アイロン仕上の作業強度は相当に大きく最近のいわゆる Wash and Wear 加工の急速に発達した所以である。しかし未だ現状ではノーアイロンの域に達しているとは思われない。前年度よりの継続研究として今回は洗濯法や乾燥法の異なる洗濯布の着皺状態とそれらの仕上げのためのアイロンかけに要する酸素消費量を種々の条件について観察測定したので報告する。

2. 90×100cmの未樹脂加工木綿布を各機種洗濯機及び手洗いによって一定時間洗濯し脱水方法も脱水機、ローラーによるもの、手しぼり、無しぼりの4方法を取り又乾燥ではドリップ乾燥及び乾燥機乾燥の2法によって処理後着皺状態を写真撮影及び収縮状態により比較した。更にこれらの処理布を標準状態に迄アイロン仕上げをするに要する酸素消費量を測定し又アイロン仕上げの基礎的条件、アイロン重量、アイロン台の高さ等による酸素消費量を比較した。尚スカート、ワイシャツ等日常着1枚を仕上げるに要する酸素消費量も測定した。酸素消費量の測定にはダグラスバッグ法を用いその呼気分析は労研式大型ガス分析器によった。

3. 手洗いよりも洗濯機洗いの方が着皺量が大きくあり洗濯機々種間の差は少ない。無しぼりドリップ乾燥が最も着皺量は小である。アイロン重量は大でも仕上げ時間を考慮すればむしろ酸素消費量は小となる。アイロン台は腕をのばした高さが能率的である。